

# 森狙仙の「写生」は凄かった

新山ひろし

かつて「山田千軒、吹田千軒」と呼ばれた吹田市山田。昔から、山田は人々にぎわう町であり、同時に、多くの寺が集まるところでもあった。この山田に、光明山紫雲寺という寺があり「大阪府有形文化財」の指定を受けた森狙仙の天井画を有している。森狙仙の描く「猿」の絵は、本物の猿が襲いかかったというほどリアルだと言われる。その、生きているようにリアルな「猿」をぜひ一度見てみたい！と思った。今回は、「狙仙の猿」との出会いの物語である。

## これが森狙仙の幻の天井画

長く寒い冬が終わり、ようやく春が訪れた。さあ、山田の紫雲寺に行こう。そして、狙仙の作品とゆっくり向き合ってみよう。阪急「山田駅」から、山田街道を東に15分くらいは歩いただろうか、目指すお寺が見えてきた。



オープンな感じの紫雲寺。予約をすれば天井画を拝観できる

光明山紫雲寺は、元々は行基が建てた法相宗の寺であったが、永禄二

年(1559)、僧法念が本願寺の頭如法主の直弟子となつて、浄土真宗本願寺派の寺となったという。「こんにちは」と挨拶すると、住職の奥様に本堂のところで迎えていただいた。本堂に入り、僕は、まず本尊の前に正座した。しかし、肝心の森狙仙の天井画が見当たらない。恐る恐る「天井画はどこですか」と訊ねると、「本尊様の上です」といつ返事。「瞬間いたが、本尊の上を見ると、おおーそこにびっしりと天井画が描かれている。」

## 森狙仙の写生の凄さに注目

この天井画は、約36センチ四方を一区画として78区画に描かれている。作品の保護のために、少し暗くしてあるのでいささか見えにくい。承諾を得て、近づいて、撮影をさせてもらった。雉、鴨、燕…そして、その中に猿の絵があった。これが、伝説の「狙仙の猿」だ！



本尊の天井に78面、星座のように鳥獣たちが踊る。壮観である

絵を見てほしい。右側にいる猿は、左にある桃をねらつてカッと大きく目を見開き、今にも跳びかからんばかり。生きているようだ。野性的な目だ。猿という記号ではなく、野性の猿そのものを描こうとする気迫が感じられる。「猿」の、この挑もつとする眼は何なのだろう。

## なぜ、紫雲寺に

### 「狙仙」があったのか

ところで、森狙仙の作品がいつ頃、なぜ、紫雲寺にあるようになったのだろう。その経緯を語る文書はないのだが、安永2年(1773)から同8年にかけて紫雲寺本堂の改修工事が行われたという記録があり、その時期に、天井に描かれたと考えられている。その時期の狙仙の年齢を彼の生誕した年(1747)から推測すると、26歳〜31歳となる。郷土史家の池田半兵衛さんが「添景の花木にはまだ、狩野派の筆致が残っていて、後年、狙仙が完成した写生の極致にはほど遠



かを考えてみたい。若い頃は、伝統的な大和絵の「狩野派」に学んでいた狙仙は、やがて、生き物や自然の景物を描く写生画にすそむく。その当時、上田秋成は「絵は応挙が世に出て、写生という事のはやり出て、京中の絵が皆一手になった」と言った。つまり、円山応挙が「写生」という絵画の革命を起こしていた。しかし、狙仙は「猿を描いては応挙といえども及ぶべからず」と世評されるようになって行く。応挙からも学び、やがて、猿の生態や仕種を克明に描き出す「毛描き」に新境地を開いたのである。その頃の狙仙の執念を伝えるエピソードがある。

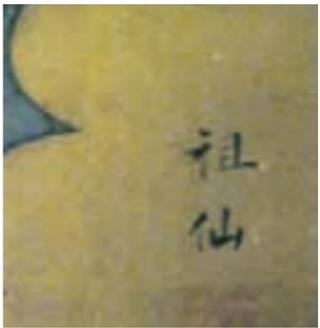
「猿の絵を極めようと、彼が家で猿を飼って写生にいらしたところ、ある人が「これは飼われた猿だ。」と狙仙を揶揄した。それ以来、彼は山に入り、自然の中の猿を写生し始めたという。あるいは、敵島神社の絵馬に

さらに、78面の天井画に加えて、紫雲寺の本尊の内陣左右の障壁にも狙仙の筆による蓮池図、燕子花におしどりと翡翠の金巻画四面があり、「狙仙」の落款がある。彼は、還暦61歳の時、獣偏の「狙仙」に改名したという記録がある。「狙」は、「猿」の意で、老年にいたり「猿の仙」になったのである。

## なぜ、狙仙は

### 猿ばかり描いたのか

なぜ、狙仙は猿ばかりを描いたのか



蓮の絵の端に落款あり。「狙仙」は60才の時「狙仙」に変わった。これは、若い時の絵だ



※紫雲寺の拝観には予約が必要です。TEL 06-6877-0126

狙仙が猿の絵を描いて奉納したところ、たまたまそこにいた本物の猿が怒り、飛びかかったというエピソードもある。まさに「狙仙の猿」そのものである。

## 「写生」という時代精神

18世紀後半、森狙仙の同時代人として、先述の上田秋成、池大雅、与謝蕪村ら有能な芸術家が大坂に登場した。「天下の台所」として、優れた商品を集めた大坂の文化人たちは、長崎で外国文化を吸収し、独特な町人文化の花を咲かせたのである。そのキーワードが「写生」という概念(コンセプト)だった。例えば、全世界から届く百科全書、植物図鑑、動物図鑑など、リアルで精密な絵画が人々を魅了した。それは、芸術だけではなく、人体を精密に描く解剖医学など学問ともクロスオーバーしていった。「写生」は、幕末大坂のキーワードとなつていったのである。

## 森狙仙の再評価が

### 日本の美術史を変える

ところで、幕末の大坂画壇で共演した「狩野派」と「円山派」と「森派」は、どのようなドラマをたどったのだろう。森狙仙は、案外、世渡り上手なところがあった。例えば、狙仙は、兄の子である「森徹山」を自分の養子とし、円山応挙の弟子にさせた。そして、徹山は、応挙の息子の嫁の妹

を妻にした。つまり、敵となるべき応挙と親類になったのである。しかも、狙仙の二人の兄は狩野派の画家のままだった。そのような幕末の大坂画壇の中で「森派」は主流を形成して明治を迎える。しかし、明治以降、美術界の権威であった岡倉天心は、森派のみではなく、大坂画壇を評価しなかった。江戸、京都に比べ、大坂がいかに「町人くさくさ」見えたのかもわからない。岡倉は森狙仙を見逃したのである。だから、叫んでおこつた。「森狙仙は凄い！」。いま、大阪の美術界では森狙仙の再評価が進んでいるという。今回、山田の紫雲寺で、初めて「狙仙の猿」と出会った。「おまえは生きているかー」と猿は迫ってきた。この猿のリアルな目を僕は一生忘れられないだろう。

協力：浄土真宗本願寺派光明山紫雲寺

#### 参考文献

- 「わかりやすい吹田の歴史・本文篇」吹田市立博物館
- 「好きやねん・郷土史論」池田半兵衛
- 「近世の大坂画壇」昭和56年 大阪市立美術館
- 「近世の大坂画壇」山水・風景・名所」堺市博物館
- 「大坂の歴史と文化財14・動物図譜をめぐって」大阪教育委員会
- 「大阪画壇の絵画」関西大学創立120年記念 関西大学図書館蔵
- 「近代絵画史」藤岡作太郎 ぺりかん社
- 「吹田市史第八巻 美術」吹田市役所